第２章　熊本市の概要

第１節　地理的特性

熊本市は、九州の中央、熊本県の西北部に位置し、有明海に面した熊本平野を中心とした総面積約 390 ｋ㎡の都市である。

地勢は、市域の西側に有明海を臨み、北西部には金峰山を主峰とする複式火山帯、これに連なる立田山等の台地からなり、東部は阿蘇外輪火山群によってできた丘陵地帯、南部は白川の三角州で形成された低平野からなる。また、熊本市の中心部を阿蘇山に源を発する白川が還流し、坪井川・井芹川・加勢川・緑川等の河川とともに熊本平野を潤し、有明海に注いでいる。

九州各県都のうち、九州北部４県（福岡・佐賀・長崎・大分）とは 100km 圏内、九州南部２県では宮崎で約 117km、鹿児島で約 133km となり 100km を超えている。平成 23 年（2011）３月の九州新幹線全線開通に伴い、福岡市とは最短で 35 分、鹿児島市とは最短で 45 分で移動が可能となった。一方で、東アジア主要都市では、熊本－ソウル（大韓民国）間（約 700km）は熊本－名古屋間に等しく、熊本－上海（中華人民共和国）間（約 900km）は熊本－東京間に等しい状況であり、日本の中でもアジアの近隣諸国に比較的近い都市である。

気候は、阿蘇外輪山と金峰山に囲まれた、夏の暑さ・冬の寒さが厳しい内陸型気候であり、冬と夏の温度差が大きく、日中の寒暖の差も大きいという特徴がある。特に夏場の平均気温は全国的にも高くなっている。

第２節　社会的特性

熊本市は、明治 22 年（1889）の市制施行以来、周辺市町村との合併を繰り返して発展してきた。平成３年（1991）に旧飽託郡４町、平成 20 年（2008）に旧下益城郡富合町、平成 22 年（2010）に旧鹿本郡植木町・旧下益城郡城南町と合併し、平成 24 年（2012）４月１日に全国で 20 番目の政令指定都市となった。

平成 27 年（2015）国勢調査によると、人口は 740,822 人（平成 27 年 10 月１日時点）であり、過去 30 年の国勢調査の推移を確認すると人口が約 1.3 倍、世帯数が約 1.6 倍に増加している一方、１世帯あたりの人員は、約 0.6 人減少し、約 2.3 人となっている。大規模調査であった平成 22 年（2010）国勢調査では年齢別人口は、年少人口が 14.5％、生産年齢人口が 64.5％、老年人口が 21.0％となっており、国や熊本県の平均値と比較すると年少人口・生産年齢人口は高く、老年人口は低い状況であるが、老年人口の割合は 30 年前の約 2.4 倍となっており、本市でも高齢化が進んでいる状況である。産業では、産業別就業者比率で政令市の中で全国有数の地位を占める第１次産業は２位、第３次産業は５位とバランスのとれた構造で、その中でも第３次産業従事者の割合が８～９割を占めており、サービス産業中心の都市である。

また、熊本市は、上水道のすべてを地下水でまかなっている世界的にも珍しい都市である。

第３節　歴史的特性

1　古代～中世

数億年前、現在の熊本市の大部分は一面の海底で、所々に小さい島が存在するに過ぎなかったと想像される。その後、数次にわたる地表面の変動によって次第に熊本平野が形成されるに伴い、現在の出水・健軍方面の砂礫層から湧き出る清冽な出水をめぐって、縄文人・弥生人の集落が形成されていった。

古墳時代を経て飛鳥時代に入り、７世紀の終わりには現在の熊本県に繋がる「肥後国」が置かれた。肥後国の中心は託麻郡・飽田郡で国府や広壮な伽藍の国分寺が建立された。こうした官衙や寺院を中心に形成された集落が次第に大きくなったものが、熊本市の始まりである。

奈良時代の日本各地は、国力の大小によって、大・上・中・下と四等級に区分されていたが、肥後はそのころ農産物産出量で九州諸国中群を抜いており、平安時代初期の延暦 14 年（795）9 月には、全国でも優位の資格を認められ「大国」に昇進した。この期に国司として肥後に赴任した道君首名、紀夏井、藤原保昌、清原元輔等は今も幾多の遺跡に名をとどめているが、特に『後撰和歌集』の撰者で清少納言の父である清原元輔と平安期の歌人「桧垣女」との交友の説話は有名である。

南北朝 50 年間は戦乱が相次ぎ、熊本地方もしばしば戦場となった。南朝の拠点となる城として、藤崎台周辺に始まるとされる「隈本城」の名が文献に見える。

長い戦乱の後、朝廷が統一されると、肥後全土の守護職は菊池氏に委ねられ、一国政令の中心は隈府（現在の菊池市）に移った。

15 世紀半ば過ぎ、菊池氏の一族出田秀信が、今の熊本城東端の千葉城に城を構え、その後、鹿子木親員（寂心）が今の古城の地に居城を移したとされる。やがて隈本城には城親冬が入り、三代目久基の時代に豊臣秀吉の九州平定を迎えた。これに伴い肥後国は佐々成政に与えられたが、成政は国衆一揆の責任を問われて切腹させられた。

2　近世

天正 16 年（1588)、加藤清正が隈本城に入城すると、国府の二本木方面から、寺院、商家等を移転させて、城下町経営に着手した。また、慶長４年（1599）頃には茶臼山の新城普請に着手し、特に河川等の土木事業に残した功績は大きい。熊本市が城下町としての体裁を整えたのもこの頃からで、熊本城も慶長 12 年（1607）には完成したとされる。

寛永９年（1632）の加藤忠広の改易によって細川忠利が入国し、細川氏時代が始まる。ここから明治４年（1871）の廃藩置県に至るまで、200 有余年にわたって細川氏が肥後熊本の政治を行った。細川氏は、歴代名君を輩出したが、その中で最も名君の誉れ高いのは、肥後細川６代藩主重賢である。重賢の頃、国勢揚がり教学も大いに振興した。特に藩校時習館や全国に先駆けて創設された医療教育機関である再春館、薬草研究で有名な蕃慈園等は、本市が長く文教の府として全国に秀でる要因となった。

3　近代

明治４年（1871）７月に廃藩置県の詔が出されると、肥後には、熊本・人吉の２県が置かれたが、同年 11 月には改められ、熊本・八代の２県となった。明治５年（1872）６月、熊本県は白川県と改称され､さらに明治６年（1873）１月には八代県が白川県に統合されたため、肥後全域は白川県の所管となり、二本木に県庁が設けられた。明治８年（1875）11 月に県庁が二本木から古城に移庁したことに伴い、翌明治９年（1876）２月に白川県は熊本県に改称された。

この頃熊本城には鎮台が置かれ、古城には洋学校と医学校が置かれるなど賑わいを見せていた。しかし明治９年（1876）の神風連の変、翌明治 10 年（1877）の西南戦争による大きな戦禍に見舞われ、特に西南戦争では市街のほとんどが焦土と化してしまった。

西南戦争後、熊本鎮台の役割は増大し、九州における政治・軍事の中心として各種の官庁が置かれていた熊本市には､明治 24 年（1891）鉄道の開通によって熊本駅が設けられた。また、30 年代に入って市区改正の大事業が行われ、山崎練兵場が市外に移されて新市街が出現すると、周辺には会社・工場・商店その他施設が次々と軒を連ね、日清・日露戦争の戦勝の意気も加わって、明治の隆盛期を現出した。

大正 10 年（1921)、周辺 11 町村と合併して大熊本市の基礎が固まり、私鉄菊池軌道・熊本軌道・御船鉄道及び国鉄宮地線の開通整備と並んで、大正 13 年（1924）には市電開通・上水道敷設・歩兵第二十三連隊移転（大正の３大事業）等によって、いよいよ近代都市の面目を新たにすることになった。しかし、太平洋戦争下の昭和 20 年（1945）には空襲を受けて全市の大半は瓦礫と化した。戦後は市民の不断の努力によって、戦災・水害等各種の困難を克服し、今日の隆盛を見ることができる。